

教師の実践知・経験知を言語化し継承する

－「学習する主体」を育むための実践技法とその考え方の読解－

神田 豊 (大津市立中央小学校)
杉山義則 (岡山県立岡山大安寺中等教育学校)
杉江修治 (中京大学国際教養学部)
高旗浩志 (岡山大学教師教育開発センター／企画・司会)

キーワード：教師の実践知・経験知、学習する主体、若手教員の育成、校内研修

一昨年度の第10回札幌大会では、「協同学習の理論・実践・技法の架橋を考える」と題するラウンドテーブルを行った。ここで登壇した話題提供者は、当時、いずれも教頭、教務主任、研究主任等の立場で、学校全体の授業改善を牽引する立場にあった。個人として自らの授業について試行錯誤を重ね、一定の成果を挙げている者ばかりであったが、学校全体で「協同学習」を共有し、自校の授業実践文化の改善を促すことには多くの困難を抱えていた。すなわち、①協同学習は「どの教師にもできる」といった簡単なものではなく、その技法の習熟には多くの困難が伴うこと、②その困難の最大の要因は、技法を運用するノウハウや、技法に習熟するための時間の不足の問題だけではないこと、③技法を共有し、形式を整えること自体は比較的容易であるが、より根本的な困難は、個々の教師の教育観・授業観・子ども観の転換にあること、という3点であった。

たとえば、今回の登壇者である神田は、前回のラウンドテーブルで次のように報告している。まず、「学び合いに取り組んでいる学校」は数多くあるが、そこで見た授業の多くは、形式的に「協同学習」を採り入れつつも、そこに子どもひとり一人が主体的に学んでいる様子が必ずしも充分には見られない。たとえば班の話し合いで活発なやりとりが展開しているように見えても、冷静に見れば一部の子どものみが話しており、他の多くの子どもたちが関わることができている授業が多くある。また、ペア学習や班学習のなかでは、「教えている子ども／教えられ続けている子ども」の関係が固定し、かえって人間関係を壊している場合もある。一斉授業を止め、ひとり一人の主体性を高める工夫を採り入れることは、それほど難しいことではないが、それによって一時的に活発な学習が展開したとしても、そこに「慣れ」が生じると、すぐさま以前と変わらぬ受動的な学習態度に戻ってしまうことが多い。学習に対してひとり一人が主体性をもち、学習課題に積極的に取り組み、友達と協同して課題発見、課題解決(探求)する学習姿勢を子どもに身につけさせるには、形式や方法だけでは解決できない「授業の見えざる部分」に辿り着く必要がある。以上が、前回のラウンドテーブルを経て我々が共有した課題意識である。

これを受け、今回のラウンドテーブルでは、子どもたちを「学習する主体」に育むため

の、授業における教師の実践知・経験知を参加者とともに言語化(読解)することを試みたい。そのために、具体的な授業実践映像(小学校6年生の算数「場合を順序よく整理して」。2014年11月に収録)を視聴する(一部分)。この授業の「良さ」に気づき、その「良さ」がどのような「技法」として現れているか、その背後にある授業者の実践知・経験知はどのようなものと類推されるか、等のことを、参加者ととともに「読解」し、言語化したいと考えている。

杉江(2011)も指摘するとおり、協同学習はグループを用いた指導の技法ではなく、学習指導の進め方の基盤に置くべき「考え方」である。真に協同学習を展開し、子どもたちひとり一人を「学習する主体」にするためには、まず教師自身が学習指導についての視点と発想を転換する必要がある。しかし、多くの教師にとって、自らの経験から蓄積された授業スタイルは、あたかも個人の筆跡のごとく、容易に変えることのできないものである。この壁を越えるには、自らの授業のありようを客観視できる(あるいは「しようとする」)「もうひとりの自分」を育てなければならない。すなわち、「メタ教授の知識・技能の習得」が必要である。さしあたり「メタ教授の知識・技能」とは、①事前に立てたプランに固執しない、②子どもの理解の様子を丁寧に読み取る、③軌道修正の手がかりは子どもに求める、④分からない子どもを主役にする、⑤答えを出すことよりも、問い続け、考え続ける過程を重視する、⑥課題に対するその子なりのアプローチを尊重する、⑦偶発性を生かす、の7点に整理できるだろう(丸野2010)。しかし、このような分類整理とラベル化だけでは充分ではない。「学習する主体」へと育てている授業の主要な部分は、その展開過程における教師の実践知・経験知が多く支えている。これを鮮明にするうえでも、授業者が自らの意図を丁寧に語り、これを観察者の読解と重ね合わせる「場」が必要である。

すなわち、このラウンドテーブルのもうひとつの目的は、校内研修における授業研究(授業カンファレンス)の方法も実践・提案しようとするところにある。若手教員の大量採用が進み、一方でミドルリーダーの不在がベテラン教師の実践知・経験知の伝承を困難にしていると言われる。また「学び続ける教員像」(H24中教審答申)や次期学習指導要領改訂に向けた文科大臣の諮問(H26.11)に典型的に現れているとおり、「教師が教えきろうとする授業(知識伝達型の授業)」から、「子どもたちに学び取らせようとする授業(社会構成主義的な授業)」への転換が強く求められている。この状況が、「形骸化した協同学習」や「協同学習の目的化」を大量に生むことにはならない。真に必要な授業改善への試行錯誤を重ねる場として、とりわけ若手教員の授業力向上を支える場として、どのような校内研修(教師の協同)が必要か、そのモデルを提案することにも繋げたい。

(文責：高旗)

【参考文献】

- ・杉江修治(2011)『協同学習入門－基本の理解と51の工夫』ナカニシヤ出版
- ・丸野俊一(2010)「メタ認知と授業」高垣マユミ編著『授業デザインの最前線Ⅱ』北大路書房